



《ひろくんを救う会 代表 陽信孝からのメッセージ》

ひろくんの ^{うから}帰国迎える仲間らの 喜びの声 空港に満つ



「ドナーが見つかった」「手術は成功」の報に胸を踊らせながら、ひろくんの元気な姿を空港で迎える日をどれだけの人たちが待ち続けたことでしょう。ニューヨークへ出発する前日、お母さんに私の思いをしたためた手紙を渡しました。「ひろくんは強い生命力をもっている。手術が成功してタラップからひろくんの手を引いて降りてきたとき、二人をしっかりと抱き締めてやるぞ。」と……。

伊丹空港で、家族の皆さん、仲間たちが今か今かと待ち続ける中、ひろくんがお兄ちゃんたちと仲良く、しっかりと手をつないで現れた瞬間、不思議と涙はこぼれず、カメラのシャッターを切り続け、迎える皆さんの顔と報道陣の姿を見続けていました。

人が幸せを感じるということはこのことなのかと。ひろくんもお母さんも、ご家族も苦しさの中で戦ってきました。我々スタッフも必死で諸々活動してきました。共に大変な戦いだったと思います。三人の元気な男の子を囲む歓喜の輪を眺めながら、みんなが幸せな気持ちをもたらしたのだと実感しました。

この度の募金活動を通じて、わたしも、活動した仲間も、多くのことを学び、すばらしい財産をもらったと確信しています。「あたたかい心」をいただいた全国の皆さんに心からお礼を申し上げます。お顔も分からない、お名前も分からない多くの方たちの一人一人の思いを一身に受け、ひろくんは見違えるほどの元気な姿で帰って参りました。ありがとうございました。

募金活動を行う中で、一つ一つが感動の連続であり、そのすべてをご紹介出来ないことが残念でありませんが、一人の小さな「命」を守るために目に見えないところで心くばりをいただいた活動を紹介させていただきます。

1月23日、寒風の夜空に海上自衛隊小月航空基地所属のヘリコプターが済生会下関総合病院から福岡空港に向けて飛び立ちました。多くの医師、看護師、家族、仲間が、ヘリコプターが見えなくなるまで手を振り続けました。

後日、小月航空基地と下関市消防局にお礼に伺った折、済生会下関総合病院の駐車場にヘリが降りた頃、小月航空基地では万が一に備えて次のヘリがエンジンを始動させて待機していたことを知りました。また消防局では、福岡空港までの20分の飛行中にひろくんに異常が起きた場合を想定して、福岡市消防局と連絡を取り合い、救急車を待機させておられました。

危機管理ということで当たり前といえばそれまでですが、一人の小さな「命」を救うためにここまでのご配慮をいただいていたことに、涙が止まりませんでした。今一つ、活動する中で出会った信頼出来るすばらしい仲間たち。ありきたりですが、すべての皆さんに「ありがとう」という言葉でお礼に代えさせていただきます。



発行元

「ひろくんを救う会」事務局
www.hirokunganbare.com